

## 「二人で同じものを眺める」、そんな心持ちで

吉田麻希社会福祉士事務所 吉田 麻希

K氏（70代後半 男性）は、「四肢障害」「老人性精神病」「認知症」の診断がしていました。公営住宅で一人暮らしをしていましたが、骨折したことをきっかけに高齢者施設に来たものの、慣れず、介護に抵抗するばかりと聞きました。

初対面で、K氏は私に、『早くここから出して、家に帰して』と言うと、あとは、『自分のことは、あまり話したくない』とうつむいたままでした。K氏の頑なな言動はエスカレートする一方で、私は、いったんK氏の望みを容れるしかないと判断して、地域の支援者や行政担当者に自宅退院に向けての援助・協力をお願いしました。けれど、近隣と悶着を起こしていたとかで、調整は難航しました。私の『相談していますから、もう少し時間をください』『力任せに帰るのは、やめておきましょう』の説得にK氏は、『どうやら、嘘は言っていないようだから・・・』と焦れながらも堪えてくれました。

月日を経てやっと自宅に戻ると、季節は初夏。田植えを終えた田んぼが広がっています。K氏はベランダからじっと見つめています。私が『きれいですねえ』と言うと、『ああ』と、いつになく返事がありました。さわやかな風が渡って、二人でしばらく、若緑の苗が風になびくのを眺めていました。

思えば、二人で同じものを眺める、そんな心持ちが私にはありませんでした。K氏は、たまに口を開けば、『嫌われて、ここに閉じ込められている』などと、ネガティブで攻撃的な一言に、あとは沈黙。取り付く島がないのです。私は、胸に刺さるような一言をぐっと飲み込むか、それすらできないときは、聞き流していました。私は、『家に帰して』というK氏の望みをかなえようと一生懸命だったけれど、少しも共感的でなかった。K氏のこと、K氏の本当の望みを理解しようとしてこなかったことに気づかされました。

K氏の好物はコーヒーとわかりました。カップにインスタントコーヒーと角砂糖を7つも8つも入れて熱湯を注ぎます。施設の生活では決して用意されない代物です。火傷するほど熱くなったカップを手指欠損がある両手で包んで、ゆっくり味わいます。ひやひやししながら見ている私に、「これではなくては・・・」と穏やかな表情を見せたK氏。人生に起こった苦難、そこでの数々の失敗、『それでも生きてきた』ことをK氏がぼつりぼつりと話すようになるのは、それから、しばらく後のことです。大切な話を聴かせてもらって、私は、やっと、支援の糸口をつかむことが出来ました。

この経験から、私は、クライアントと信頼関係が築けず、相互交流に行き詰りを感じたときは、「二人で同じものを眺める」心持ちを思い出すようにしています。無理強いしてでも向き合わんとする気負いが失せて、心にゆとりを取り戻せるような気がするからです。